

4. ロンドンの調査結果の特徴に関する分析

小松郁夫（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部长）

舘林保江（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部研究協力者）

（1）ウェブ上での調査決定の背景と課題

今回「国際6都市調査」を実施するにあたり、ロンドンでは紙ベースではなく、ウェブ上でのアンケート調査を試みることにした。先進諸国において教育の情報化が国策になるなか、イギリスが学校教育の中でのICT（Information and Communication Technology）環境の設備とその実践において先駆的に取り組んでいる国の1つだからである。ウェブ上での調査をすることにより、社会的流動性の高い都市であるロンドンが持つ特徴の、海外から移住してきた英語を母語としない子どもたちのことを考慮した。2006年10月には、参加予定校の協力を得て、事前調査を実施した。その事前調査では、ウェブ調査による機能的課題を含め、ICTのネットワーク環境の安全設定であるファイアウォールへの対応、事前に想定されなかったような課題も確認することができた。

ロンドンの子どもたちにとって、このようなアンケート調査に参加することは、大学や研究機関からの依頼も日常的にあるので、決して珍しいことではないが、今回のようなウェブ上での回答はきわめて新しい経験であったようである。個人情報保護の観点より、参加予定校には、調査やデータ使用の目的などを事前に説明し同意を得た。

調査地域には、現地協力者が得られ、そし

て全国統一試験で平均的値を出している複数の地区を選んだ。調査校の選定は現地協力者に依頼した。地域間・学校間で社会経済的様相が大きく異なるロンドンにおいては、調査地域の選定によってデータの内容に差が出るものが予想されたからである。

（2）質問紙作成、検討の経緯

質問項目を作成する際には、ロンドンの特徴を考慮し、使用する表現・用語の検討が何度も繰り返された。この検討には、ロンドンに住む現職のイギリス人教員や元校長たち、イギリスに長期在住する学齢期の子どもを持つ日本人、初等学校に通学するイギリス人・日本人の子どもたち、日本に滞在するイギリス人英語教員などの協力を得た。重点的に検討されたカテゴリーには大きく分けて3つあった。1つめは、学校教育に関することであり、とくに、学習教科、学習環境、教授法そして学校の成績・結果に対する考え方などである。2つめは、イギリス社会の特徴に関するものであり、3つめが、家庭環境に関するものである。

① 学校教育に関すること

● 学習教科の特徴

まず、学習教科の特徴を説明する。イギリスでは1944年から1988年までは「宗教」のみ

が必修科目であったが、1988年の「全国共通教育課程 (National Curriculum)」が成立してからは大きく変化した。社会科が「歴史」と「地理」に分かれている。日本ではIT (Information Technology) と呼ばれる情報教育は“communication”を入れ、「ICT (Information and Communication Technology)」と呼ぶ。実務系の教科として「技術 (Design and Technology)」や「美術 (Art and Design)」がある。また、「人格的社会的健康教育 (Personal, Social and Health Education)」は、日本における「道徳」と「総合的な学習の時間」と「保健」の学習内容に重なるような教科である。質問項目の中に「現代外国語 (Modern Foreign Language)」を設けたが、これは2010年までに初等学校でも外国語の学習を実施するという政策方針が一時的に出されたものの、教員養成などが間に合わずに中止になった経緯がある。40%近くが「履修していない」と回答しているのは、そのためである。

●学習環境

学習環境としては、イギリスでは教科書の無償配布はなく、学校が購入したものを共有する。教科書の検定制度もない。「1988年教育改革法」によって導入された全国共通教育課程の規定にそって、教員はプリントなどの教材を配布する。ノートを含め鉛筆や消しゴムなどの文房具類は学校で無料配布され、プロジェクトや宿題が出されるとき以外は、ノートは家に持ち帰らずに教室のロッカーに置いたままである。実際、予習復習をするという習慣はほとんどない。このようなことから、「予習をしてから授業を受ける」「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」にはどのような回答があるのか懸念された。

イギリスの学校ではICT環境の整備が進行し、日本の「黒板」にあたるものとして、「電子情報ボード (interactive whiteboard)」が急速に普及している。産業界からの支援もあり、今後の知識社会に求められるICT技術の習得ということだけではなく、効果的な学習

方法は一人ひとり異なるので、視覚や聴覚にも訴えるクリエイティブな電子機器を用いることで学力向上を図ることをねらっている。また、授業は一斉授業ではなく、個人の課題やレベルにあわせた個別や少人数の指導なので、日本のように教員が黒板に書いたことをノートに書き写すことはほとんどない。そこで「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」は不適切に思われ、質問項目には含めなかった。

●教授法

授業では子ども同士で話し合うペアワークや、少人数によるグループ・ディスカッションなどの教授法が多用されるために、「近くの人とおしゃべりをする」も検討を要した。議論を重ね、最終的に日本語表現の“おしゃべり”の意味を伝える英語表記として、「授業とは関係のないことをおしゃべりする (I chat about nothing related to the lesson)」で落ち着いた。日英の教授法の違いがうかがえる質問であった。

●学校における成績・結果

学校における成績・結果に関する質問では非常に興味深い意見交換があった。「あなたの今の成績は、クラスの中でどのくらいですか」を英語表現では「Where do you think you would come for your test/exam results?」と最終決定をしたが、“成績”を“results”とすることはイギリス側からの強い要望であった。学校教育の“結果”とは何を意味するのか、日英の教育制度と概念の違いによる議論があった。イギリスの初等教育段階では7歳と11歳の時(第2学年・第6学年修了時)に全国統一試験が実施されるので、“結果”とはこの試験の結果である。その子にとっての最大限の結果を引き出すために、授業は児童の学力と課題にあわせ個別や少人数指導で行われる。さらに、児童の学力を3つくらいに分け、その学力に応じた目標設定がされ、取り組む教材も異なる。多くの学校で第5学年

から、算数・国語・作文の授業は習熟度別編成になる。つまり、イギリスでは、一人ひとりの才能や学力は異なるので、その子にあわせた課題や目標を設定することが、その子の能力を最大限に伸ばすことにつながるという考え方に基づいている。これは日本の考え方と異なるものであろう。

第2学年で実施した全国統一試験のデータに基づき、個人の到達目標が設定されるだけでなく、学校全体の目標も設定される。このように試験の結果に基づく目標設定や習熟度別学習が導入されているが、イギリスの学校の成績表 (school report) は学級担任によるコメントが教科ごとに寄せられる形式である。子どもの長所をほめる前向きなコメントが多い。多くの学校が自己受容を高めるような教育理念を持ち、授業中にもほめ言葉が多用される。評価も多角的視点から行われるので、概して子どもたちは自分への評価が高く、自信を持つ子が多い。また、算数や国語のようなアカデミックな教科だけではなく、スポーツや芸術教科に対する評価も高いことや、ロンドンが文化的、民族的、宗教的にも多様な多文化的都市であることから、この“結果”という用語をどのように理解するのか、何に対する結果なのか、その理解と解釈において有意義な議論が交わされた。イギリス人の元校長より、明確な試験名を入れたらどうだろうか、と提案があったことも興味深い。

② 社会の特徴に関すること

● 放課後の過ごし方

2つめのイギリス社会の特徴を反映したものとして、放課後の時間の使い方がある。家庭学習に関しては、イギリスでは塾産業がほとんどないので、通塾率はかなり低いことが予測された。試験・受験勉強をする際には家庭教師を雇うのが一般的である。

その他の放課後の時間の使い方として、イギリスではボランティア活動などの地域活動、ユース活動、教会やモスクなどで行われる宗教関連の活動も多い。このような地域活

動や宗教関連の活動にはさまざまなものがある。たとえば、環境問題に関する学習や奉仕活動、子どもたちの家庭において話されている英語以外の言語の学習や宗教教義の学習、それに関連する行事やイベントなどもある。音楽やスポーツの活動も多く、スポーツではやはりプロチームのあるサッカー (イギリスでは“football”という) が男の子にはもっとも人気があり、女の子には体操やダンスやバレエが人気である。つまり、放課後の時間の使い方は、家庭の社会的、経済的、文化的背景により異なることが予想された。

● 社会における競争の理解のしかた

もっとも議論となったものは、「(わが国は、) 競争がはげしい社会だ」の質問項目である。英語での表現は「I find the society in this country highly competitive」で落ち着いたが、この表現と質問の意味をめぐって、多くの人の意見が寄せられ、議論と検討が重ねられた。イギリス社会が歴史的に階級・階層社会として発展し継続している背景があるので、この質問への意見やその受け止め方もさまざまであった。この表記の最終決定までに寄せられた意見には、「人が集まるところには常に競争があるものだ」「何に対しての競争なのか」「“競争 (competitive)” という言葉は子どもの英語レベルによっては理解することが困難であろう」「子どもの文化的社会的背景によって理解のしかたが異なるであろう」などがあつた。

③ 家庭環境に関して

3つめの家庭環境に関するものとして、イギリスでは家族形態も多様化しているので、「お母さんは私の成績をよく知っている」と「お父さんは私の成績をよく知っている」を、ロンドン版では1つにして、「My family knows my results」とした。

(3) データから読み取れる6都市との比較とロンドンの特徴

ここでは各都市のデータと比較したロンドンの特徴についての分析と考察、そして今後の検討すべき点などを述べることにする。データより読み取れるロンドンの子どもたちの特徴は、大きく4点あげることができる。1点目は、子どもたちが学校の勉強に高い価値を見出している点である。2点目は、自己肯定感の高さである。3点目は、家庭での学習時間の特徴であり、4点目が、家庭でのパソコンや携帯電話の所有に関する点である。

① 学校の勉強に対する期待感の高さ

まず、データから読み取れることは、ロンドンの子どもたちが将来質の高い生活を送るために、学校の勉強は役立つものであるという非常に肯定的な見方をしていることである。「学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか」の質問において、職業選択や経済的な豊かさにかかわる質問の「一流の会社に入るために」「お金持ちになるために」、そして精神的な満足度をたずねる「心にゆとりがある幸せな生活をするために」「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」の各項目に、「とても役に立つ」および「まあ役に立つ」と回答をしたのが、85.4%、78.6%、91.6%、88.7%である。p. 48~49の図1-3-7「勉強の効用」を参照すると、各都市の実態がわかる。非常に興味深いことは、この質問項目に対するロンドンとワシントンDCの数値が近似していることであり、もっとも懸念されることは、東京の子どもたちの学校の勉強に対する期待感が非常に低いことである。

ロンドンにおける学校の勉強への期待感の高さは、その他の質問項目の回答にも反映されている。たとえば、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」に対しては81.1%、「今は勉強することが一番大切なことだ」は60.9%が肯定し、成績にこだ

わる姿勢は「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」の14.5%の数値にも反映されている。子どもたちが描く将来の生活の中で「よいお父さん、お母さんになるために」学校の勉強が、「とても役に立つ」(70.3%)、「まあ役に立つ」(17.6%)と回答しているのも興味深い。

このように「将来満足感のある生活を得るためには、学校の勉強は大切である」と考えているロンドンの特徴については、授業や勉強の意義と目標をしっかりと子どもに理解させる指導が、日常的に繰り返し行われていることも影響していると思われる。たとえば2007年5月に実施した現地調査では、「私たちは授業の前に今日の学習内容と達成目標を確認してから、授業を開始します」という教員の発言があった。

一方で、テストで間違えることに対してはくやしいと思わないというデータもあり、先ほどの成績にこだわる姿勢と併せて、この2つは一見矛盾しているように思え興味深い。「テストで間違えるとくやしいと思う」の設問に対して、ロンドンの子どもたちは、18.1%が「よくある」、22.9%が「時々ある」、22.3%が「あまりない」、そして驚くことに36.7%が「ほとんどない」と回答している。テストで間違えてもくやしいとは思わないとは、一体どのように考えればよいのであろうか。

現地調査での聞き取りでは、このことに対して以下のような意見が聞かれた。イギリス人教頭・校長から、「イギリス人の子どもたちはよくいえば自分に自信があり、悪くいうと傲慢だから、自分が間違えるはずがないと思っている」という強い自己肯定感に基づく解釈や、「間違えることによって、自分の理解できていないことがわかるので、それを有効に活用すればよいくらくやしいと思う必要がない」という向上への指針とする考え方が聞かれた。

ちなみに、この設問に対する東京の子どもたちの回答は、55.7%が「よくある」、24.5%が「時々ある」となっており、それは北京の

数値とほぼ同じである。間違いに対するこの考え方の違いはどこに起因しているのか。文化的違いや授業中の教授法の違いに注目してみると、東京においては間違えることはくやしい、極端に言えば「間違いはいけない・恥ずかしいこと」という受け止め方がある。それは正解・不正解を求める授業形式を背景としていることに起因する。一方、イギリスではトライ・アンド・エラーの経験主義に基づき、解答に至るさまざまな考え方を試みる教授法であり、そのことが影響しているといえよう。

②自己肯定感の高さ

イギリス人の子どもの自己肯定感に対する教員の意見を引用したが、それを裏づけるようなデータがみられる。ロンドンの特徴の第2点目は、自己肯定感に関するものである。「あなたの今の成績は、クラスの中でどのくらいですか」に対する回答について、p.42の図1-3-1「成績の自己評価」をみていきたい。

子どもの主観的な見方を問うこの質問に対して、自分の成績が真ん中よりも上と回答している割合（「1（上のほう）」＋「2」＋「3」の％、以下同）が、ロンドンでは59.8%である。つまり、半分以上の子どもたちが、自分の成績はクラスの中で半分より上に位置すると認識しているのである。ワシントンDCは71.8%が、ヘルシンキは70.0%が同じように回答している。一方、北京では52.0%、ソウルが49.4%、東京においては39.1%にとどまる。通常このような調査における回答は、中位がもっとも高くなる山型のカーブを描くことが多い。東京、ソウル、北京は見事にこのカーブを描いているが、ロンドンとワシントンDCは2～3割が「1（上のほう）」であると回答し、山のカーブが上位に移動している。この結果に対しては、いくつかの要因が考えられよう。

社会的要因として、イギリスでは塾産業がほとんどないので偏差値によるランクづけは

ないが、全国統一試験の結果に基づく到達目標の設定や授業形態としての個別学習や習熟度別学習など、子どもたちは自分の能力や学力について明確な認識を持っている。一方で、成績表での長所を伸ばすようなコメントや授業中の肯定的なほめ言葉、そして多角的な評価の視点などが、バランスよく児童に受け入れられ、トータルとしてこのようなデータとなったのではないかと推測される。しかし、もしこの質問を中等学校で実施するならば、同じようなデータが得られるかどうかは疑問である。

③家庭での学習時間に関して

3点目の特徴は、家庭での学習時間を問う「家での勉強時間などについてお聞きします」という質問に関する回答である。p.30の図1-2-1「平日の学習時間」、p.31の図1-2-2「宿題をする時間」をみると、ロンドンの学校外の学習時間は多い順に「およそ30分」（28.3%）、「1時間」（28.1%）、宿題の時間は「30分」（26.3%）、「45分」（21.4%）となっている。イギリスでは宿題に関するガイドライン（school homework policy）があり、宿題が学校と家庭の連携のもとで行われることを強調している。第5・6学年では、読み書き・計算に関して毎日30分間の宿題が目安とされている。

ロンドンではノートや教科書は学校に置いたままであり、宿題はプリントによる配布が多いので、家庭学習への取り組みは家庭による差が大きい。学校文化や社会的風潮としても予習や復習の習慣がほとんどないことから、ここでのデータはかなり実態に近いものといえよう。しかし、「予習をしてから授業を受ける」の質問に対しては61.7%、「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」にも72.3%が「あてはまる」「まああてはまる」と回答している。現地調査においては、子どもの中には宿題をするを予習や復習をしていると理解している子がいるのではないかという意見が聞かれた。

④携帯電話・パソコンの所有率の高さ

4点目は、家庭でのパソコンや携帯電話の所有率に関してである。ロンドンの子どもたちは、55.0%が「自分専用のパソコンを持っている」、54.9%が「自分専用の携帯電話を持っている」と回答し、6都市中、パソコンに関してはもっとも高く、携帯電話に関してはヘルシンキの93.0%に次いで第2位である。この数値は、パソコンではもっとも低い東京の12.8%、携帯電話では北京の18.8%と比較すると非常に高い。

現地調査では、子どもたちはたとえ家族で共有するパソコンでも自分専用と回答する傾向があるのではないかと、との意見が聞かれた。半数以上が“自分専用の”パソコンや携帯電話を所有するという今回のデータをそのまま鵜呑みにするには、注意が必要であろうが、家庭でのパソコン使用率も非常に高いこととあわせると、子どもたちの生活の中にパソコンや携帯電話がかなり普及していることがわかる。「家でパソコンを使う」に66.1%が「よくある」、23.8%が「時々ある」、「家でインターネットを使って何か調べる」にも50.7%が「よくある」、32.6%が「時々ある」と回答している。

社会的特徴でもあるが、イギリスの子どもたちは安全面の理由によりおとなの付き添いがなければ外出ができないことや、また気候条件もあり、家の中で過ごす時間が長いことがその要因として考えられる。外出時の安全のために携帯電話を持たせる家庭も増えている。

※本節の内容や用語については、植田みどり先生（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部）、天野圭子先生（ロンドン在住・日本語教師）にもご教示いただいた。

（4）まとめ

以上、調査実施までの経緯と、ロンドンのデータの特徴をまとめた。東京および他の4都市と比較すると、ロンドンの子どもたちの学習スタイルや成績評価の特徴が明らかになった。とくに、勉強に対する期待感が非常に高かった。現地調査から、授業のはじめに学習内容と達成目標を明確に説明する、教員たちの指導の工夫などとあわせて、ロンドンの小学校で勉強の意味づけを重視している様子がわかった。

また、ロンドンの小学校におけるICTのスキル・関心の高さも明らかになった。今回、このようなウェブ上でのアンケートに参加する試みは、学校側にとってはきわめて新しい、初めてに近い試みであった。当初参加を表明していたが、ウェブ上での回答であるとわかると、参加を断る学校が数校あった。しかし、調査に参加した19校のうち、事情により1校のみがウェブ上での回答ができなかったが、他の学校ではとくに問題もなく回答してもらうことができた。そして、データからは家庭でもパソコンが子どもたちの生活に浸透している様子もうかがえた。

このように有益な分析結果が得られたが、ロンドンの小学校にみられる多様性を忘れてはならない。今回は都市間比較ということでデータは全体値のみを使用した。ロンドンには多様な文化的、民族的、宗教的背景をもった都市である。属性別の分析、あるいは中等学校を対象とした調査などを実施すれば、また違った知見が見い出せることも考えられる。